

山
宣

西口克己著

中央公論社一九五九年

山宣 ©定価二九〇円

昭和三十四年四月三日 印刷
昭和三十四年四月八日 発行

著 者 西口克己

発行者 栗本和夫

印刷者 柳川太郎

発行所 中央公論社

検印廃止

東京都中央区京橋二ノ一
電話56-5921-29
振替口座東京三四

目次

序章	ゴルゴダの丘	三
第一章	エデンの園	八
第二章	智慧の木の实	三
第三章	わが肉の肉	五
第四章	モナリザの生誕	六
第五章	二人の予言者	八
第六章	哀れなイヴたち	一〇
第七章	追放	一三

第八章 地の塩

一五三

第九章 われ笛吹けど

一七七

第十章 海をへだてつ

一八六

第十一章 月光にぬれて

二六

第十二章 冬きたりなば

三九

第十三章 卑怯者 去らば去れ

三七

終章 墓もうごく

二六

あとがき

三九

山^{やま}

宣^{せん}

序章 ゴルゴダの丘

ぶきみな、なまあたたかい風が吹いていた。

その丘陵の南方から上空にかけて、灰いろの雲がいちめんに重苦しくおおいかぶさり、反対側の北方に起伏している低い山脈には、まだ夕映えの光があかるくカッと照っていた。が、それもほんのつかのまで、強風に吹きまぐられた雲影が、あたかも巨大な古代恐竜がのたうつようにみるみる移動して、北方の山脈をも、うす暗く包みこんでしまった。山脈の樹々が、枝をゆさぶられ、無数の白い葉裏をみせて、なにか密生した獣の毛をいっせいに逆撫するようになり、ざ、ざあ、とおののいているさまが遠くからもハッキリと眺められた。

丘陵の中腹には、大小さまざまな墓石が、それぞれの向

きに幾十となく並んで立っていた。そこは宇治町の墓地だった。石垣や鉄柵にかこまれて格式ばった墓があるかとおもうと、捨石まがいにはボツンとただ一つ孤立した墓石もあった。いまにも倒れそうに朽ちはてた木製の卒塔婆も、斜めに何本か列をなしている。いずれにせよ、その地底にはすでに一片の白骨と化したかすしれぬ死者たちが、まさにその死者という平等の資格で眠っているのだ。そのせいか、近よって吟味すると、生前の貧富や地位を示す墓石の大小や格式の差があるとはいえ、全体としては、何の差別もなく白骨を吸って生えでた奇怪な茸にも似て、一定の地帯に仲よく群がっているのだった。

暗い空の一方で稲妻が青白く走ったかとおもうと、それ

につづいて雷鳴が、遠くから地上のすべてを押しつぶすように、とどろきわたってきた。宇治の町から、この墓地へ通じる一本の狭い坂道は、ふだんから寂しかったが、ましてこの天候では人っ子ひとり見あたらない。よほどの目的をもつ者か、それとも狂人でもないかぎり、こんなときこんな場所へ来るはずがなかった。

ところが——それは昭和六年初夏のことだが——その異常なことが起った。坂道からではなく、道らしい道もない丘陵の裏手の茶晶のあいだを潜って、背をかめながら三人の屈強な男たちが、この墓地へ忍びこんで来たのだ。彼らは顔を見られぬよう古手拭で頬かむりをしていたが、垢じみた盲目縞の筒袖や股引などからおして、どうやら近在の農民らしかった。が、あらかじめ打合せてあったとみえ、その動きはすばやかだった。一人が墓地のはずれの竹やぶの蔭に身をひそめると、もう一人はさらに遠く坂道の中途まで走って行って、大きな礫の幹に姿をかくした。ひよつとして、こんな空模様にもかかわらず、町の方からやってくるかもしれない人間を見張るためだ。やがて遠くの男から順に片手をふって合図が送られると、墓地に残っていた最後の一人が、つかつかと或墓の前へ近づいて、頬被りのまま、ぎこちなく頭をさげた。

「先生——われらは負けまへんで。やつらが十一回塗りつぶしやがったら、われらは十二回彫りおこすまでや

……」

その墓の構えは、周囲に低い石柱と鉄柵をめぐらせた格式ばったものだったが、その中央の台石の上に立っている黒灰色の墓石そのものは、生きた人間の上半身が何ものかに向ってグッと肩をそびやかせているような恰好の、ふしぎな力づよさと素朴さにあふれていた。

ひとりごとを呟きおえた男は、もう一度、見張役の方をふりかえりながら、すばやく鉄柵をのりこえて墓石の裏側へ廻りこんで行くと、ふところから妙な道具をとりだした。ふだんの野良仕事には用のない太い五寸釘と金槌とである。コツ、コツ、コツ——男はその墓石の裏面の或部分を指のさきで探りながら、注意ぶかく五寸釘をあてて、右手に握りしめた金槌で叩きはじめた。不馴れな、こまかい神経の要る仕事とみえて、男の眼つきは、憑かれたようにギラギラと光っていた。

「ちくしょう、やつら、いつになったら根負けしくさるんや」

墓石に文字を彫る石工に似たこの仕事は、じっさいには、その逆だった。男は、すでに刻みこまれた文字が『やつらの命令で一面に石膏で塗りつぶされているのを、彫りおこしていたのだ。それだけに、文字以外の部分をまちがって彫り欠いたりすると、せつかくの努力がむだになるし、大切な墓石に傷をつけることになる。素人にはむりな仕事だ

が、そうかといって大びらに専門職人に頼める性質のものではなかった。もしこんなところを《やつら》に見つかつて捕えられたが最後、おそらく半殺しにされたあげく、一年や二年の懲役は覚悟しなければならなかったのである。それも最初のうちはとにかく、ちかごろでは監視の眼がひどくきびしかった。

「あつ、降つてきたな」

乾いた石膏の面を大粒の雨がバラバラと叩き、シミのうにひろがつたかとおもうと、つぎの瞬間には、無数の銀の棒に似た太い雨脚が、ザザァ、ザァとあたり一帯に落下し、水しぶきとともに包みこんでしまつていた。すぐ附近の墓石さえ見えなくなるほどのすさまじさだった。男の軀は、たちまちドブ鼠のように、ずぶぬれになつてしまった。頬かむりの手拭がべつたりと顔にへばりつき、その結び目や顎から、ボタボタと水滴がしたり落ちた。いくらあせても、五寸釘や金槌を握つた両手の見当が狂つて、ほんとど仕事にならなかつた。それどころか、この雨では、かんじんの見張番の合図も見えないし、叫び声もきこえないおそれがあった。

しかたなく仕事を中止しようとして、男がなかば腰を浮かしたとき——一瞬、墓場全体が青白い閃光に照らされ、バリリーンと耳膜も裂けるほどの雷鳴とともに、男のからだは、しびれるような衝撃をうけて、もとの墓石にへばり

ついていた。ちかくに落雷したのか、かすかにキナクさい匂いが男の鼻をついた。かなりのあいだ男はそのままの姿勢でうずくまつていたが、やがてどう気をとりのおしたのか、ずぶぬれの、はげしくふるえる手で、ふたたび五寸釘を墓石に突きたてたのだつた。すでに最初の一字——《山》という字は彫りおこされていた。墓石にしがみつくような恰好で、男はその次の一字にとりかかったのだ。

「くそつ、こつちがしんどいときは、やつらもしんどい、へこたれるな。この雨と雷とは、天のたすけちうもンや、こんな中を、なんぼなんでも、やつら、出向いてこんやろかい」

地獄の幽光さながら、やつぎばやに青白く閃めく稲妻と、耳をつんざく雷鳴の下で、男の軀は、まるで執念のかたまりと化したように、その墓石にへばりついて離れなかつた。ずぶぬれの石のおもてを探りながら、五寸釘が動いてゆくに つれて、何分間か経つと、ようやく《宜》の一字が浮かびあがり、さらに何分間かの後には、つぎの一字が彫りおこされて行つた。雨滴は、とつくに男の木綿着を透して肌にしみこみ、初夏とはいえ、ぞくぞくと冷たかつた。男はその気味わるい冷たさをふるい落そうとでもするかのよう唇をかみしめながら、低い唸声で唄をうたいはじめた。《しのめ、くらく、反動の……》というその文句は、調子はずれの経文にも似て、絶えてはつづき、つづいては、

とだえた。

だが、そんなふうには、うろおぼえの唄をうたいながら、一心不乱に仕事をつづける男の胸には、いまさらのようにふかい悲しみの念がこみあげてくるのだった。この墓の下の人には、貧乏人の身がわりになって死んでくれたのだ。いわば自分たちが、その人を前へ前へと押しだして、《やつら》に殺させたようなものだった。そうおもうと、遺族の人々にたいして申しわけがなかった。が、それにもまして《やつら》の仕打ちが憎かった。寺の住職もいうとおり、どんな悪人でも死ねばみな仏のはずなのだ。しかも、その人は悪人どころか、りっぱな、りっぱな人だった。それを、死人に鞭打つという言葉があるが、墓石にまでたたるとは——つまり《やつら》は人間ではないのだ。裏面の文字を石膏で塗りつぶさないかぎり、墓石を立ててはならぬ——そんなむごい法律がどこにある。そのために、その人の母堂は年寄りの身で、やっと中学生になったばかりの喪主の孫をつれて、一ヵ月もの永いあいだ東京まで歎願に行かれたが、ついに許可はおきなかった。《やつら》の一人が石工の親方のところへきて、いますぐ塗りつぶせと命じたとき、昔気質の親方が、遺族の指図以外は受けられぬと突っぱねたのも、やはりむだだった。結局、いまから二年前の昭和四年に、墓石は《やつら》のいうままに塗りつぶして立てるほかはなかったのだ。

最初、その塗りつぶされた墓石の文字を彫りおこしたのが誰なのか、それはいまだに謎だった。げんに雷雨に打たれながら金槌をふりあげているこの男ですら知らないのだ。だがその噂は、宇治の町から、日本中の《やつら》を憎んでいる仲間たちのあいだへ波紋のようにつたえられた。それは、殺されたその人の最後に叫んだ言葉を永久に忘れない仲間が、いくらでもいるぞ、という痛烈な意志表示であった。《やつら》にとっては《一個の怪物がヨーロッパをうろついている》どころか、まさにその怪物が、日本を、しかも叩きこんだはずの牢獄のそとを、憎むべき聲音をたててあるいているということであった。だが獣じみた憎悪の牙をむきだして、遺族やそのまわりの人々をいくら責めたて調べあげてみても、すべてむだだった。二千年の昔、あの荒涼としたゴルゴダの丘から十字架の主を運び去った犯人が永遠の謎であるのとおなじように、《やつら》はどうしてもこの犯人たちを描えることができなかった。のみならず秘密の仲間は仲間を呼び、ついに二年後のこの日、ねばりつよくも十二回目の抵抗が決行されたのである。

初夏の雷雨にしては、めずらしく一時間ちかくも降りつづいた猛烈な雨脚がようやくおとろえて、銀糸のように夕闇に仄めくころ、男はどうやら仕事をやりとげていた。気がせいいていたので、墓碑銘の前文と、署名者の部分までは手をつけられなかったが、かんじんの本文だけは彫りおえ

たのだ。雨中での馴れぬ仕事に疲れきった男は、さすがに
ほっとした面持で、よろめきながら立ちあがると、墓地の
外で忍耐づよく見張りをつづけていた仲間に向って、片手
を大きく振って合図をした。永らくうずくまっていたその
見張役の男が、竹やぶの蔭から這いだと、頭上の竹の葉
に溜っていた緑色の水しぶきがバサバサとその背中へした
たり落ちるのが、遠目にも見てとれた。さらに遠くの坂道
にいた男も、ずぶぬれのまま小走りに駆けもどってきた。

「殺生な雨や、まるで滝に打たれたみたいに、軀の芯ま
でぬれくさった」

「文句をいうな——どうや、これでええやろ」

あとに証拠を残さぬように用心ぶかく金槌と五寸釘をふ
ところにしまいこんだ男にいわれて、見張りの二人は、じ
つとその墓石を見つめながらうなずいた。

「上出来や。まさかわしら百姓の仕業とは気がつくま
い」

「これでわしらも、山本さんに一つ恩返しができたわけ
やな」

三人の男たちは、やや改まった面持で、骨太い両手を合
わせながら、頭をさげて黙禱した。だが、むろん長居は危
険だった。やがて三人は、もときた茶臼のあいだを、ドブ
鼠のようなすばやさで、どこかへ逃げ去って行ったのだっ
た。

男たちが逃げ去ったすぐあと、あれほど暗かった空の一
部がポツカリと切れて、まだ沈みやらぬ夕映えの残照が、
ほんのしばらく、ぬれそぼった大小の墓石を、ふしぎな美
しさで照らし出した。とらえどころのない乳白色の靄が、
あたりいちめんにけぶっていた。そのなかの、男たちが黙
禱をさげた墓石には、ちいさな真珠のような水滴がキラ
キラと光り、次の墓碑銘が、神秘なまでのあざやかさで浮
かびあがっていた。……

山宣ひとり孤塁を守る

だが私は淋しくない

背後には大衆が支持しているから

第一章 エデンの園

深紅や朱や黄や白のバラの花が、あたりいちめん何百輪となく、四月の太陽の光をあびて咲いていた。しずかな早朝だった。光は、バラの花びらの一枚々々を外側からあたため、幾重にも抱きあつた内側の花びらを透して花芯にあつまると、甘い香りをこめた目にみえぬ虹のように、ホッと花輪の上へ吐きだされた。深紅のバラからは深紅の香りが、白いバラからは白い香りが漂い、それらの香りは、たがいにからまり、もつれあつて、花園一杯にひろがつていった。そのなかを、小さな金いろの虻が、あたかも黄金の甲冑に身を固めた中世の騎士のような凜々しさで、かすかな翅音をたてて、花から花へと、とび交うていた。

不意に、花園のまんなかで数輪の黄バラが揺れうごいた

かとおもうと、一人の若者が、背の高い上半身を現わして立上がつた。若者は麦藁帽をかぶり、ズボンに白シャツ姿で、片手に大きな剪定鋏をにぎっていた。いうまでもないことだが、バラの花をこれほど美しく咲かせるには、さまざまな手入れをしなければならない。土に肥料をあたえ、炎天や霜に気をくばり、枝葉をととのえ、水をやり、さらに一つ一つの蕾が色づきそめる頃、その柔らかな、ほそい緑色の花茎にむらがつて、樹液を吸いつくしてしまう油虫を駆除しなければならない。その永いあいだの若者の苦心が、いまやエデンの園さながらに咲き匂っている真紅や朱や黄や白のバラの花となって、むくいられたのだ。やがて若者は、そのバラの花群をながめながら、いかにもたのし

そんな声をはりあげて、讚美歌を唄いはじめた。

そらはほがらに 地はうるわしく

愛のみしるし 世にみちあふる

いざほめうたわん あめつちの主を

若者の名は、宣治といった。彼が聖書をよみだしたのは、両親がクリスチャンだったせいもあるが、それよりも彼自身中学一年生で肺をわずらい、中途退学させられたときの少年らしい悲しみや、その軀をなおすために父から花つくりをおしえられたというような、いわば世間の寒風から隔離された一種の温室に似た純粹な環境のせいだった。《花をつくって世のなかを美しくする》というのが、この若者の、ほほえましい理想だったのだ。

それにしても、明治四十年というその当時、普通の日本庭園に見られる牡丹や藤やツツジとちがひ、この宇治川畔の料亭の一隅に、いわば異国風のバラの花園があるのは、めずらしかった。それどころか、このバラの花園の所有者が、京都商人らしくもなくクリスチャンだったという、そのことのなかに、この若者の生誕にまつわる一つのロマンスが秘められていたのである。

いうまでもなく京都は、千数百年來の古都であり、もろの神社仏閣の所在地であつた。その、うすぐらい漆野を引いた碁盤縞ながらの町筋の隅々にまで、古い伝統や因習が、蜘蛛糸のようにからみついていた。明治維新後まもなくできた京都駅に向つて、これらの低い家並を従えながら傲然と構えた東西両本願寺の伽藍は、その恰好からみても、外來の信仰をにらみつける二匹の巨大な土蜘蛛に似ていた。いうなれば京都の商人たちは、荒あらしく吹きすぎて行つた維新という台風の下地の地表にしがみついた蘚苔のように、ケチケチと生きのびたのだ。その店構えは、暗い格子戸を立てた狭い入口のわりに奥行が長く、ひとたび昔ながらの屋号を染めぬいた暖簾をくぐると、その陰気な屋根の下では、旦那から番頭、手代、丁稚小僧と、日常の坐る位置までキチンときまっていた。朝食は、いかに大店でも一人残らず冷たい板間に膝をそろえて、粥をすすることであつた。

宣治の父、山本亀松は京都四条通の、こんな商家のなかの一軒——かなり大きい金物商の三男にうまれた。彼がうまれてまもなく父が死んだので、家督をずっと年上の長兄が嗣いでいたが、亀松自身は商家特有の因習と、なによりも三男という不利な立場のせいで、ちいさい頃から丁稚として、東京の次兄の出店へ預けられ、こき使われた。もしこれが身分的差別のピクとも播るがぬ江戸時代だったら、

彼も堅苦しく奉公して、小さな暖簾の一つも分けてもらつたであろう。だが、江戸から東京へと、はげしく変転してゆく世相のなかで、こうした因習に堪えつづけるには、彼はあまりにも感じやすく、負けぎらいにできていた。小遣金をためて、書店でひそかに買った福沢諭吉の《学問のすめ》を、店番しながら盗み読みしていたために、主人顔の次兄から算盤でなぐられたことや、その次兄の家族たちが内風呂へ入ったあと、夜おそく一番最後に湯槽に浸かると、いつも垢がギリギリと浮いていたことなど——なぜ、こんなにまでして頭を下げていなければならぬのか、どうにも納得できなかった。

「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず、か——ふん、おもしろくもない」

周囲に誰ひとり理解者もなかった亀松の気持は、しだいに捨鉢の、ひねくれた反抗へと向いて行つた。丁稚から手代になった頃には、茶碗酒をあおり、廊がよいの味をおぼえ、さてはときおり大きな目玉をむいて、次兄に喰つてかかるまでになっていた。

明治十八年の春、ついに亀松は、とんでもないことをやつてしまった。旅商いといって、東北地方へ註文によつて送つた商品の集金に差向けられたのだが、東京へもどるなり、その大金をそっくり色町で費つてしまったのだ。以前にも店の集金をこまかしたことはあつたが、こんな大金は

初めてだった。何日間かの酒色からさめて、げっそりした姿で色町を出た彼は、次兄のひどい折檻を覚悟しながらも、行きどころがないままに、結局ふてくされて店へ歸つた。

「こ、このバカものめがッ」

みるみる怒気をみなぎらせて、拳をふりあげた次兄は、だが意外にも次の瞬間、なぐるのをやめて、じつと青い顔をして亀松をにらみつけ、肚の底からしほりだすような悲痛な声で、つぶやいた。

「ささま、とうとうこの店を、つぶしてしまいやがった……」

さすがに、そこまでは亀松も気がつかなかつた。商家のヤリクリは、金銭の融通でつながれた数珠玉のようなもので、アテにしていた珠が一つ抜取られるとバラバラになる危機があるものなのだ。そうだったのか——ガックリとうなだれて両手をついた亀松を見下ろした次兄は、「坐つてろ」と一言いいすてたきり、奥の間へ引籠んでしまった。そのまま半日近くも坐りつづけていた亀松に向つて、むりからぬことだが、嫂は食事の声一つかけようとしなかつた。

一旦店を閉じた次兄の店は、親族会議の結果どうやらつぶれずにすんだが、そのかわり亀松は、極道者の烙印を捺されて、京都へつれ戻されてしまった。しかも長兄は、彼をこのまま家業の金物商に使つていては、これから先もど

んな大穴をあけぬでもないと警戒して、大いそぎで分家させ、まるで商売がいの小さな昆布店をもたせたのだった。

むろん亀松は、一日中うす暗い店先で、それこそ亀のように首をちぢめて昆布削りに精出すような男ではなかった。彼にあてがわれた昆布屋という商売は、店が小さいだけに、ほぼそとした手内職にちかく、そうした職人仕事の鎖で彼の軀をつなぎとめようとした家兄たちの肚がわかつているだけに、亀松は、またぞろむくれた。

「東京店の責任を俺一人にかぶせ、あぐくのはて、この俺にこんなケチな商売を押しつけやがって——ちえつ、バカにするな」

彼は、留守番役に同居していた母親をだまし、長兄の目の届かぬのをいいことにして、うろうろと祇園や宮川町の廓を、ぼつつき歩いた。なけなしの店の売上金や、母親のへそくり銭では間に合わず、到るところに借金や不義理をこしらえ、ついにこのことが長兄の耳に入った。

「ほんまに何というガキや。お母はん、世間では亀松のことを、あれは亀松やない、泥亀やいうてまっせ。あんな奴、乞食にでもならんと、目がさめまへん」

ほとほと手をやいた長兄は、泣いて詫げる母親の顔を立てたというよりは、やはり本家としての体面上、ついに一計を案じ、亀松を京都から追出して、大津の或店の養子にやることにした。養子先は大津の兵衛へ食糧を納入する

請負屋だったが、嫁があるわけではなく、男まさりの老婆が一人で采配を振っていた。

「亀松、あんたはこの家を追出されたら、行きどころのない男やで。そのつもりで、店の丁稚とおなじように精出して、働きや」

仕事どころか、毎夜その鬼瓦のような顔をした老婆の肩もみまでせられた。

「ふん、バカにしてやがる、廿七にもなった大の男を子供扱いにしくさって……」

それでも半年あまり歯をくいしばって辛抱したあぐく、ついに或日、亀松はこの義母を相手に大喧嘩をしてしまった。

「俺がハイハイと小さくなつてりや、いい気になりやがつて、くそ婆め、とにかく只働きさせられた半年分の給金だけは、もらって行くぜ」

「そうかい。そんなら、もう二度と家の閤をまたがんときやっ」

「あたりきよ、頼んだつて、帰るもんか」

さえぎる老婆を足蹴にせんばかりにして、店の帳場から十円札を一枚、むりやりに奪いとった彼は、そのまま汽車にのって京都へ逆戻りしてきた。

むろん何のアテもなかった。ただ、むやみと人肌が恋しく、女の匂いにうえていた。結局、ままよ、と半ばヤケ気